

The Thinking Machine の中国語訳

渡辺 浩 司

1

《小説大観》第八集(発行所: 文明書局・中華書局, 1916年12月)に《偵探小説 關口奪氣案》が掲載された。書名の下に“譯美國通俗雜誌”とあり、アメリカの雑誌から訳した作品だとわかる。その下に、“秋山”と訳者の名が挙がっている。

訳者“秋山”は、胡寄塵(=胡懷琛)のこと、原籍は安徽・涇県、1886年生まれ、1938年没、小説家としてだけでなく、編集者や大学教員、学者としても活躍した。

さて、この《關口奪氣案》の原作は、Jacques Futrelle 『The Thinking Machine: . The Case of the N--- M---』(初出? 『The Popular Magazine』25-4, 1912年9月1日, 未見, 本稿では『The Case of the Scientific Murderer』(Kessinger Publishing, 刊行年月日不記)を使用した。以下、作品名には『The Case of the Scientific Murderer』を使用する*¹)。いわゆる“The Thinking Machine”ものである。

原作者 Jacques Futrelle は、アメリカの作家で、1875年生まれ、1912年タイタニック号に乗り合わせ、遭難。主に雑誌や新聞に小説を発表し、活躍していた*²。

2

まず『The Case of the Scientific Murderer』のあらすじを紹介する。

5月4日木曜11時に Beacon StreetのFamily Hotel で、Violet Danbury の遺体が発見される。遺体には顔以外に外傷はなく、その顔の傷も小さなもので、争った跡や盗まれた物もなかった。そして遺体の足下に割れたグラスがあったので、Mallory 刑事は服毒自殺だと判断した。更に聞き込みから、被害者は Cecelia Montgomery と一緒に泊まっていたこと、その Montgomery は現在町を出ているこ

小 說 大 觀

偵探小説
關口奪氣案
譯美國通俗雜誌



像一樹芙蓉蒙罩着黑烟的樣子那面上一種描寫不出可怕的神情與被絞死的人一樣櫻唇上略帶微傷似乎生前曾受過輕輕打擊左頰上亦帶傷痕但極小極微傷口又不見血明明無致命的關係旁

關口奪氣案

一

千九百十五年四月四號星期四早晨十一點鐘的時候皮空街的一個大旅館內發現一件奇案寓客之中有一位唐寶柔女士無故死在自己房間之內死時形狀非常奇怪人家死後都是臥倒的他却端坐椅中身着華服好似第一日夜間赴劇場歸來尙未更衣的樣子酥胸袒露與所御夜服上燦爛的寶石輝映着實可憐可愛平時玉貌此時僅有黯晦的容顏好

秋山

と、被害者は昨日は大学教授の Charles Meredith と出かけていたこと等を知る。そこに弁護士の Herbert Willing がやって来て、受付に Danbury を呼んでく

れと頼む。Mallory は Willing に彼女が亡くなったこと、死因は自殺と見られることを伝える。すると Willing は自殺の責任は自分にあると言い、昨日彼女が所有する不動産取引に失敗したと伝えたことや実際には彼女がお金に困っていたこと等を話した。

翌日、検死の結果が出る。それは毒によるものではなく、肺の空気がなくなったことによるものだった。つまり、自然死でも自殺でもなく、奇怪な超自然的な方法で殺害されたのだった。

翌週の月曜の朝、Atlantic Avenue に住む港湾労働者の Henry Sumner が自宅で遺体となって発見される。遺体の状況は Danbury と全く同じで、足下には割れたグラスがあった。

新聞記者の Hutchinson Hatch はこの二つの謎を持って、The Thinking Machine(思考機械) - Augustus S. F. X. Van Dusen 教授のもとを訪れた。Hatch は二つの事件について話し、更に Danbury と一緒に泊まっていた Montgomery が失踪したこと、二人の被害者の室内が火曜の晩に何者かによって荒らされたこと、そこに女性のもつと見られる、血による手の跡が残っていたことを伝えた。思考機械は少し質問すると、その殺害方法を看破し、Hatch に Meredith が物理学か自然科学に通じているかどうかと二人の被害者の間に何か関係があるのかを調べてくれるよう命じた。

ちょうどそこに家政婦の Martha が入ってきて気絶する。15分後、回復した Martha から、思考機械へ電話があり、電話の主が二人を殺した犯人を知っていると聞いた時、電話の向こうで別の男の声と息が詰まるような音が聞こえたことを聞く。思考機械は電話局へその番号を調べるよう依頼し、Hatch は Willing に電話するが不在だった。

午前4時、Willing のオフィスで、Willing が口を塞がれ椅子に縛り付けられ、秘書の Maxwell Pittman が前の二人と同様に殺害されているのが発見される。Mallory は、回復した Willing から薬をしみこませた布で鼻を覆われ気を失ったこと等を聞き、その場でC. M. のイニシャル入りの薬をしみこませたハンカチを見つける。

Hatch は思考機械の研究室に戻り、第三の殺人について報告する。思考機械はタクシーを呼び、その間に、Hatch に殺害方法について実験を交えて説明する。

二人は Meredith 会いに行く。思考機械が Meredith から Danbury について尋

ねている間に、Hatch は Pittman の唇についた傷の寸法を測り、Willing から Danbury について聞いてくるよう思考機械に指示され、出かける。

2時間後、Hatch は思考機械の研究室に行き、二人は George Parsons の所へ出かける。面会后、思考機械はおもちゃ屋で小さなゴムボールを、デパートで婦人帽の留めピンを買う。思考機械はHatchから傷の寸法を聞き、そして彼が Willing に1時間後に会うと聞くと、自分は三人を殺害した犯人を知っており、明日正午に警察に通報すると伝えるよう言う。

翌朝、Mallory と Hatch が思考機械を訪れた時、そこに Montgomery が自ら警察に現れ、Mallory に面会を求めているとの連絡が入り、Mallory は戻る。思考機械は Hatch に留めピンと指示を与える。Mallory が再びやって来て、Montgomery は殺人は否認しているが、二人の部屋に入ったことは認めていること、Sumner は Danbury の遠い親戚らしく、Parsons も Danburyと親戚関係にあることを話した。

そこに Willing が訪ねて来たので、思考機械は Mallory と Hatch に隣室で待つよう言う。部屋に入ってきた Willing に対し、思考機械が犯人は Willing だと言うと、Willing は瓶状の凶器を持って思考機械に襲いかかり、それを思考機械の口に押し当て作動させる。思考機械がやられたふりをすると、Willing は持参したグラスを床にたたきつけた。証拠がそろったので、思考機械は凶器を口からはずし、Mallory と Hatch が Willing を取り押さえた。

四人は警察へ行き、Montgomery に会い、Willing が Danburyの不動産を狙っていたという犯行動機が説明され、事件の経緯が明かされる。

なぜ第三の被害者が警察ではなく、思考機械の所へ電話をかけたのかがわからないし、殺害方法を示した実験の場面で、一方が閉じられ、一方がバルブ(stopcock)につながれたガラス管の口(mouth)にゴムをかぶせるとあるものの、その「口」とは一体どこなのか不明であるが、とにかく殺害方法の奇抜さにならざるにはられない作品である。

『The Popular Magazine』掲載が初出だとすると、タイタニック号遭難が1912年4月で、この作品の発表が同年9月であるから、これは Futrelle の遺作の一つである。

この作品は、後に『Vacuum』という題で、イギリスで発行されていた『The

Storyteller』誌(1922年12月,未見)に掲載され、その中では舞台設定もイギリスになっているそうである。また、『The Popular Magazine』での発表前に、The Thinking Machine ものの短篇集のために、すでに書き直されていたようである。それが、後に『The Case of the Mysterious Weapon』という題で、Futrelle の遺稿として『Ellery Queen's Mystery Magazine』83(1950年10月,未見)に掲載された*3。

ついでに、『The Case of the Scientific Murderer』(『SM』と略称する)と『The Case of the Mysterious Weapon』(『MW』と略称する)の大きな相違を指摘しておく。後者については、日本語訳である吉田誠一訳『謎の凶器』(ジャック・フットレル著,宇野利泰訳『思考機械の事件簿Ⅰ』東京創元社1977年7月15日初版/1985年10月25日8版)*4を使用した。

冒頭部分：『SM』は、思考機械への賛辞を含む短い紹介で始まっている。一方、『MW』は、研究実験中の思考機械と家政婦のマーサとの会話が置かれている。

登場人物名：『SM』は、第一被害者といっしょにいた女性を「Cecelia Montgomery」としている。一方、『MW』は、「セシーリア・デイヴィッドスン」となっている。

殺害方法を実験によって示す部分：『SM』は、上記あらすじで述べたとおり、Hatch から第三の殺人を聞いた後、Hatch に対してだけ、殺害方法を示す。一方、『MW』は、思考機械の家で犯人を逮捕し、警察へ行き、また Hatch と Mallory を連れて実験室に戻ってから、すなわち最後に、Hatch と Mallory を相手に、殺害方法を示している。

3

中国語訳について述べる。

まず別作品の原作探求の手掛りになるかもしれないので、主な固有名詞の対照表を以下に掲げる。

原文	中国語訳
Van Dusen	王 登生
Hutchinson Hatch	郝聚
Mallory	馬羅立
Martha	馬沙

Danbury	唐寶柔
Cecelia Montgomery	施 夢歌(施 孟歌 とも)
Charles Meredith	麥里的
Herbert Willing	魏林

すでに言及したように、原作では冒頭に思考機械の短い紹介がある。中国語訳はそれが省略され、The Thinking Machine の登場時に人物の説明がある。中国語訳を以下に示す。日本語訳は、『The Case of the Mysterious Weapon』の訳である、前出吉田誠一訳『謎の凶器』を参考・引用した。

有一個報館訪員。名叫郝聚。就爲此案。特訪那全英著名的一個大科學家、大哲學家王登生先生。問他對於此案意見若何。先生曾得過哲學博士、醫學博士、皇家學會會員。及各種頭銜。是英國第一個飽學。衆人因爲他腦力過人。思潮奇異。遂送他一個徽號。喚做思想機器。他曾在大學校當過教師。現在告老家居。不甚與人來往。(6頁,句点は原文のまま,読点は補った)

(新聞記者の郝聚は、この事件のことで、全イギリスで有名な大科学者であり大哲学者である王登生の所を訪れ、事件についての意見を聞こうとしていた。王登生は哲学博士、医学博士、王立協会会員、その他様々な肩書を持ち、イギリス一の博学であった。周囲の人々は彼の頭脳が卓越し、思考様式が特別なので、彼に「思想機器」という称号を贈っていた。彼はかつて大学で教鞭をとっていたが、今では退いて家におり、人との交際も少なかった。)

事件の第一被害者がイギリス人であることからだろうが、中国語訳は、舞台をイギリスだと考えている。

次に、原作では事件発覚の日付を、年を記さず、ただ5月4日としている。しかし、中国語訳では、1915年4月4日とし、勝手に年を加え、なぜか月を改めている。

全体の書き方について、原作は簡潔を旨としているように見える。一方、中国語訳は、台詞にも地の文にも、場面を説明するための加筆が非常に多く、くどいほどである。一例を挙げる。第三の殺人現場で Mallory がイニシャル入りのハンカチを拾った場面である。

“ ‘ C. M. ’ ” he read; his eyes blazed. “ Cecelia Montgomery! ” (13頁)
(「 「 C. M. 」 」 彼は読んだ ; 彼の目が光った。 「 Cecelia Montgomery! 」)

他想了一想道 : “ 這是施孟歌夫人的絹。因爲施字的第一字母爲C.。夢歌的第一字母爲M.。罪人斯得。也可算是天網恢恢。疎而不漏。此案既破。以前同樣暗殺。必彼所爲無疑。 ” 當時喜得手舞足蹈。樂不可支。其實幾次暗殺。果是施夫人所爲呢。讀者到後來自然要明白的。(12頁,コロン・引用符は補った)

(彼は少し考えて言った : 「 これは施孟歌夫人のハンカチだ、 「 施 」 の一文字目はC、 「 夢歌 」 の一文字目はMだからな。これで犯人がわかった、やはり天の網は目が粗いようだが、悪人を逃さないと言えるようだ。この事件が解決した以上、前の同じ方法の殺人は間違いなく彼女の犯行だ。 」 その時には、踊り出すほどにこの上もないくらい喜びました。しかしこれらの殺人は果たして施夫人の仕業なのでしょうか。読者の皆さんには後ほどはっきりとおわかりになるでしょう。)

イニシャルの説明は仕方がないとしても、その後の台詞は余計であるし、読者への呼びかけには大変に違和感を覚える。だが、これが当時の中国読者のためには、必要な加筆と思われていたのであろう。

誤りは少なく、数ヶ所といったところである。一例を挙げる。第三の殺人を聞いた The Thinking Machine が Hatch に話す場面である。原文と中国語訳を示す。

“ There may be two more, ” the scientist remarked. “ Be good enough to call a cab. ”

“ Two more? ” Hatch gasped in horror. “ Already dead? ”

“ There may be, I said. One, Cecelia Montgomery, the other the unknown who called on the telephone last night. ” (13頁)

(「 更に二人あるかもしれない、 」 科学者は言った。 「 タクシーを呼んでくれ。 」

「 更に二人? 」 Hatchは恐怖ではっと息を止めた。 「 すでに死んでいるのですか? 」

「 かもしれないと言っただろう。一人はCecelia Montgomeryで、もう一人は

昨夜電話に呼び出した人間だ。」)

博士道：“事變還多。以後還有兩人要送命呢。”

郝聚聽說大以爲異。堅問：“那兩個。”

博士道：“一是衆人所疑爲罪犯的施孟歌夫人。那一個是一個不知名姓的男子。

昨日與我同到電話局的。”(12頁)

(博士は「状況はもっと変わるぞ。今後更に二人が殺されるだろう。」)

郝聚はそれを聞くと、とてもいぶかしがり、はっきりと尋ねた。「どの二人ですか？」

博士は「一人はみんなが犯人だと疑っている施孟歌夫人、もう一人は氏名不詳の男で、昨日私と一緒に電話局に行ったのだ。」)

The Thinking Machine を電話に呼び出そうとした人が第三の殺人に関連しているのは推測しているはずなのに、なぜまたその人を「two more」に含めているのか、原作自体が解釈できない。中国語訳では、更に話をねじ曲げている。

省略も数ヶ所見られる。一例を挙げておく。第一被害者の検死後、Mallory と検死した医者たちがその死因について話す場面で、最後に、Mallory について描写し、そして医者の一人在、吸血鬼か何かでは、と言い出し、Mallory がそれを最後まで聞かずに部屋を離れるという所がある。この場面は中国語訳ではすべて省かれている。

他に、原文では The Thinking Machine という語が当然ながらよく使われているが、中国語訳では“博士”が専ら使用され、“思想機器”という語は上述の紹介場面と最後(20頁)の訳者による加筆部分の2か所しか使われていない。The Thinking Machine 作品が中国で浸透していないためであろう。

書名が《關口奪氣案》=「口を塞いで空気を奪う事件」と、謎を明かしてしまっているのが不満ではあるが、翻訳全体としては、くどい加筆を除けば、うまく訳していると思う。

最後に、おなじみの場面の中国語訳を示す。

博士坐在一張椅上。頸後仰。目上視。兩手指捏着指。靜聽他的說話。(7頁)

(博士は椅子に座り、首は後ろにそらせ、目は上を見、両手の指を重ね(指で

指をつまみ)、彼の話静静地に聴いていた。)

4

『The Case of the N--- M---』、『The Case of the Scientific Murderer』、『Vacuum』、『The Case of the Mysterious Weapon』、『An Absence of Air』というように、同一のストーリー展開を持つ作品が、長期にわたり名前を変えて繰り返し発表されている。これほど注目される作品を、1916年12月という早い段階で訳出しているのは、訳者の選択眼の高さを物語っているであろう。

The Thinking Machine ものの最初の日本語訳は、管見によれば、『新青年』第20巻第11号(博文館,1939年8月5日)掲載の植村清訳「完全脱獄」(「The Problem of Cell 13」の訳)である*5。

この《關口奪氣案》掲載が1916年12月であるから、日本語訳に比べると、かなり早い中国語訳の登場である。本稿も、探偵小説の翻訳について、中国の方が日本より進んでいたことの証左となるであろう。 

【注】

- 1) 原題については、William G. Contento 管理ホームページ(HP)「The FictionMags Index」では、『The Thinking Machine: . The Case of the N--- M---』とある。Michael Koser, Gerd Pircher 管理HP「PROFESSOR VAN DUSEN: Die offizielle Professor van Dusen-Seite」では、『The Case of the N--- M---』とあり、別題に『The Case of the Scientific Murderer』とある。そして、かつろう管理HP「私立本格推理小説「風読人: ふーだに」と」では、『The Case of the Scientific Murderer』となっており、バラバラである。本稿では、“The Case of the N--- M---”はわかりにくいと考えたので、“The Case of the Scientific Murderer”を使用した。
- 2) 余談であるが、『新青年』第4巻第5号(博文館,1923.4.1)掲載の、西川登志次「秘密探偵小説と其映畫」には、「ヂヤツク・ヒユートル物」項があり、「歐洲大戦中、タイタニック號に乗り込んで居た爲、獨艇の犠牲となつた佛蘭西の作家である。」と紹介されている(185頁)。ひどい誤りである。
- 3) 参考にした戸川安宣「シャーロック・ホームズのライヴァルたち - 《思考機械》と生みの親フットレル」(ジャック・フットレル著, 宇野利泰訳『思考機械の事

件簿Ⅰ』東京創元社1977.7.15初版 / 1985.10.25 8版所収)には、「ドーヴァーの傑作選第二集(-『Great Cases of the Thinking Machine』のこと-筆者)に収められている」(356頁)とあるが、私の入手した『Great Cases of the Thinking Machine』(Dover Publications, Inc., 1976年)には無い。

- 4) 初出は『ミステリマガジン』14-5(早川書房, 1969年5月1日)掲載で、題名は「謎の兇器」。この雑誌初出版と単行本収録版とは、思考機械の自称が前者で「わたし」としていたのを後者で「ぼく」と改めるなど、字句に若干違いがある。
- 5) この「完全脱獄」より早い日本語訳としては、The Thinking Machine ものではないが、ジャック・フットレル「^{ママ}緑色の小壘」(原作不記, “緑色”のルビは“あをいる”)が、田中早苗訳『現代探偵傑作集』(グラント社, 1925年5月1日)に収録されている。但し、Jacques Futrelle の妻で、やはり作家であったMay Futrelle の作品に「The Green Bottle」(『Ainslee's』30-4, 1912年11月, 未見)があるらしいので、「^{ママ}緑色の小壘」がそのまま Jacques Futrelle の作品だとは断定できないと思う。

【参考文献・ホームページ(HP)】

陳玉堂編著《中国近现代人物名号大辞典》浙江古籍出版社1993.5

裴效維執筆“胡寄塵”(馬良春、李福田総主編《中国文学大辞典》第6巻, 天津人民出版社1991.10)

Jack Adrian and Robert Adey 編 『Murder Impossible』 Carroll and Graf Publishers, Inc., 1990年 (- 1922年 『The Storyteller』掲載の『Vacuum』が、Jack Adrian の紹介と改編を経て、『An Absence of Air』なる題で収録されている)

Dennis Poupard 編 『Twentieth-Century Literary Criticism』 Volume19, Gale Research Company, 1986年

Terrie M. Rooney 編 『Contemporary Authors』 volume155, Gale Research, 1997年
戸川安宣「シャーロック・ホームズのライヴァルたち - 《思考機械》と生みの親フットレル」ジャック・フットレル著, 宇野利泰訳 『思考機械の事件簿Ⅰ』(東京創元社1977.7.15初版 / 1985.10.25八版)所収

戸川安宣「シャーロック・ホームズのライヴァルたち - ホームズのアメリカ上陸」ジャック・フットレル著, 池央耿訳 『思考機械の事件簿』(東京創元社1979.12.21)所収

戸川安宣「シャーロック・ホームズのライヴァルたち - 《思考機械》譚の先進性」
ジャック・フットレル著, 吉田利子訳『思考機械の事件簿』(東京創元社
1998.5.22)所収

ジャック・フットレル著, 宇野利泰訳『思考機械の事件簿 I』東京創元社
1977.7.15初版 / 1985.10.25八版

ジャック・フットレル著, 池央耿訳『思考機械の事件簿』東京創元社1979.12.21

ジャック・フットレル著, 吉田利子訳『思考機械の事件簿』東京創元社
1998.5.22

William G. Contento 管理HP「The FictionMags Index」

<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2008年7月3日確認)

かつろう管理HP「私立本格推理小説「風読人：ふーだにっと」」

<http://www.cityfujisawa.ne.jp/~katsurou/katsu/katsu.html> (2008年7月3日
確認)

N・M卿管理HP「ミステリー・推理小説データベース Aga-Search(アガ・サーチ)」

<http://www.aga-search.com/> (2008年7月3日確認)

Michael Koser, Gerd Pircher 管理HP「PROFESSOR VAN DUSEN : Die offizielle
Professor van Dusen-Seite」

<http://www.profvandusen.com/> (2008年7月3日確認)

(わたなべ ひろし)